Osaka University Knowledge Archive

Title	建築の「建設」と写真の「認識」
Author(s)	堀口, 豊太
Citation	デザイン理論. 1997, 36, p. 66-67
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53281
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

建築の「建設」と写真の「認識」

堀口豊太／京都市立芸術大学

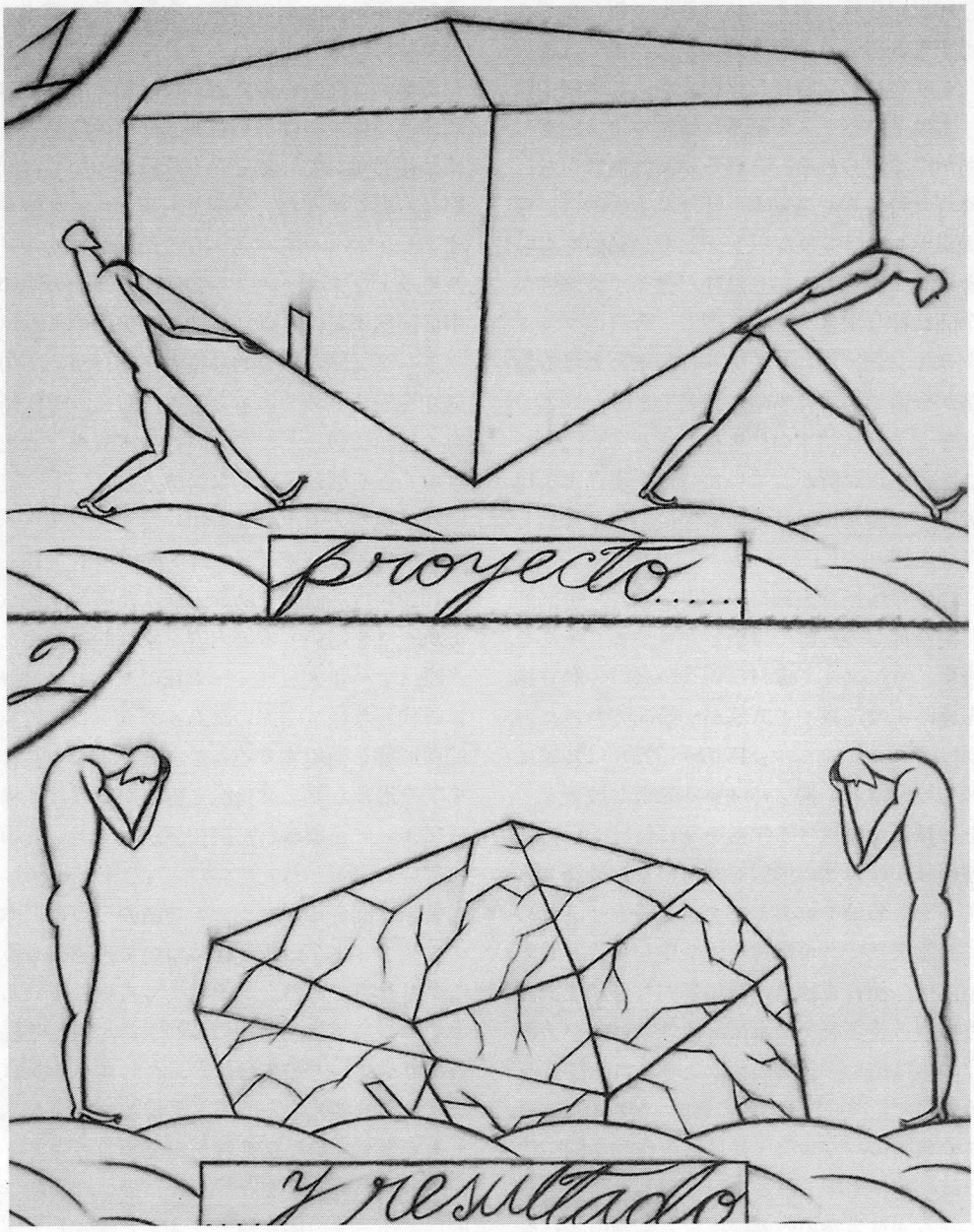
ホセ・ベディアという作家による「計画…とその結果」という絵があります。「計画」と称する上半分には，重い建物のようなものを運び歩く二人の人が描かれています。「…とその結果」と称する下半分には，ひびがはいり，崩れ倒れた建物を前に，頭を抱えて困惑している二人が描かれています。時間の前後を空間の上下になぞえたこの絵は，朝起きた時と夜寝る時，若さと老いを対比しているかのようです。上は，未来に向かってその成功を祈り，楽観的に行動を起こす人の図で，その反対に下は，過去を振り返りその失敗を悔やみ，悲観的に思考する人の図ともいえるでしょう。例えば上は発展途上国の希望，下は発展を遂てしまった国の悪夢といえるかもしれません。

私は建築と写真と両方の分野で仕事をしています。建築と写真という異なった二つの媒体は，環境というものに対してどのように働きかけ，どのように思考するのでしょうか。この絵を参考にしたのはほかでもありません。それはこの問いに答えを与えている，即ち，建築と写真という二つの媒体の本質的な差をあらわしているように思えるからです。端的にいえば，上の絵は建築家の世界観を示し，下の絵は写真家の世界観を示しているかのようです。建築家は，環境の具体的な問題に対し，具体的な解決を提案し，その実施によって環境をより優れたものにするべき倫理的な義務を背負っています。建築家は職業柄からして「建設的」でなければならないのです。

写真家はというと，環境をよりよくしなければならないという義務はありません。そもそも写真家は環境を撮影することはあっても，環境を変えることはできないからです。写真家に義務があるとすれば，それは環境の認識を深めることにあります。環境とは人が正しく意図してつくったものだけではなく，人の誤った意図に従ってできたもの，意図せずにできたもの，意図に反してできてしまったものなどすべてを含みます。現存する環境は折衷的であるのがその必然であり，過去のあらゆる時間にできた環境が積層して存在しています。また環境というものは，四季や一日のあいだの光の移り変わりにより絶えず変化しています。このような複雑な存在である環境を総合的に，また最も確かな具体性をもって，視覚にうったえる記録として残すのが写真なのです。写真家は「認識的」でしかありえないのです。

日本の既存の環境を踏まえて新しい建築をつくるということは，日本の環境にある程度の希望をもたらすものであると私は考えています。建築の仕事をしているとき，私は日本の環境につき，「建設的」であろうとしているのです。

しかし私の建築がいかに「建設的」であろうと，その建築を含む日本の環境全体の悪夢を変えることは難しいのです。その難しさに抵抗するのではなく，その悪夢を自分と無関係のものではなく，自らのものとして把握するのが写真です。写真を撮るとき私は「認識的」であろうとしています。それは建築にはない，写真独自の役割でもあります。


1
proyecto.....
2
.....y resultado